

家族における相互作用と個人のシステム境界の形成

——接触と分離のバランス——

八 木 秀 夫

仁愛大学人間学部

Interaction within the Family System
and the Forming Process of Individual System Boundary:
The Balance of Connectedness and Separateness

Hideo YAGI

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

Social interaction is the basis of both society and the individual, for social system is composed of patterned social interactions. Social interaction is also important for an individual, for without social interactions no one can survive/develop in this world. Social interaction, however, presupposes both the existence of individual persons and the ability of having interaction between them. When one person is included with the other (symbiosis) or when two are located too far from one another, there can be no interaction. The balance of connectedness and separateness is necessary for functional interaction. From the perspective of system theory it means that having a functional system boundary is crucial for a living system to survive/develop in this world. The function of a system boundary is making a system to exchange matter-energy or information necessary for the system with other systems outside (environment) keeping its identity at the same time.

The most important function of a modern family is to make an adequate/flexible system boundary of each family member through everyday interactions. No other social system can be substituted.

How is it possible for a family to make an adequate/flexible system boundary of individual members? What is its mechanism?

This is the theoretical study of social interaction, especially the process of making an adequate/flexible system boundary of an individual personal system as the basis of Social Interaction.

Key Words : System boundary, connectedness and separateness, functional family system, interaction within a family system

はじめに

幸せな子ども時代を持つことは人間の一生にとって最も重要なことであり、幸せな子ども時代を持つことができたものは世界中でもっとも幸福なもの一人である。

ある。それは、クリントン大統領が彼の2000年「国民家族週間」の宣言文で指摘したように、「愛情と責任に根ざした強固な家族で大切に育てられたものは成人としての重要な課題を達成するのに優位な立場にいる」からである。成人としての重要な課題とはなにか、

それは「十全に生き、生産的な活動をし、社会に貢献し、そして自分自身が強固で、安定した家族を形成する」ことである。これは自らがアダルトチルドレンであることを表明したクリントン大統領の言葉として意義深いものである。アダルトチルドレンとは、アルコール依存症の親を持つなどして、不安定な家族で不幸な子ども時代を過ごし、成人になってから生活の息苦しさを感じているひとたちのことである。^①

成人として重要な課題を達成するのに優位な立場にあるというのは、人生のさまざまな段階において直面するであろうさまざまな課題、それは時としては人生の一大危機として体験されるようなものであるが、これらの課題に適切に対応し、かつ克服することができる安定したパーソナリティを持つということである。

それでは、安定したパーソナリティとはどのような特徴をもち、それはどのようにして形成されるのだろうか。人間のパーソナリティは幼児期に家族を中心とする人間関係、つまり両親をはじめとする身近な人たちとの相互作用のなかで形成される。安定したパーソナリティはどのような相互作用によって形成されるのか、また、どのような場合にそのことに失敗するのか、そのメカニズムについてこれまでの家族システム論の研究成果を踏まえて理論的に考察するのが本論文の目的である。

1. 個人のシステム境界 (System Boundary)^②

システム理論、とりわけ、「生きたシステム (Living System)」の理論では、適切なシステム境界の形成がシステムの維持存続にとって決定的に重要と考えられている。システムの維持存続にとって重要な機能は、システム境界機能だけではないが、システム境界の機能は最も重要な機能の一つであると考えられている^③。それは、境界機能は、第一にシステムの維持存続にとって基本的な、a) 物質・エネルギーとb) 情報の処理過程の両者にかかわるものであり、その両者の摂取・排出、インプット・アウトプットをコントロールする機能を持つからである。第二に、周囲の外界や他のシステムとは区別されるシステム自体の同一性 (Identity) を維持する機能を持つからである。

システムが生き続けるためには、システム論の用語でいえば、エントロピーの拡大をおさえネグエントロピーを高めるためには、システム外部からさまざまな物質・エネルギーや情報を取り入れる必要がある。そのためにはシステムは外部から遮断されたシステム、閉鎖システム (closed system) であってはならず、外界に開かれた、開放システム (open system) でなければならない。しかし、システムは開放的であると同時に外界や他のシステムとは異なる独自の存在としての同一性を保持するものでなければならない。^③

外界との物質・エネルギーや情報のインプット・アウトプットをコントロールし同時に自らの同一性を保持するという一見相反するようではあるがシステムにとって不可欠な機能を受け持つがゆえに、境界機能はシステムにとって最も基本的な機能と考えられるのである。

外界とのアウトプット・インプットは、個人システムのレベルでは、具体的には他者との相互作用を通して行われる。

境界機能のあり方は、周囲の外界や他のシステムのあり方によって歴史的社会的に変化し、歴史的社会的な外部環境に適したものでなければならない。それは時として大変困難な仕事である。その例は、生きたシステムの一つである国家システムの現代における境界形成の難しさからも容易に理解されるところである。現在、情報・交通手段の革命的な発展とともに急激に進行するグローバリゼーションのもとで、国家を外部に開放しつつ、国家としての同一性を保持し、内部の構成員である国民をいかに保護していくか、従来の時代には考えられないほどの難しい問題となっている。

個人境界にしても同様である、急激に変化する外的環境のなかで、その変化に対応しつつ自我同一性を維持するのは容易ではない。主体が農業生産で長男単独相続のもと家系が維持されていた戦前の社会におけるパーソナリティと近代的パーソナリティの境界形成のありようは大いに異なる。大多数の者が親とは異なる職業に就くようになり、そのための職業訓練を家族ではなく学校などの公的機関において受けるようになった現代社会ではそれに適応したパーソナリティはそれまでの前近代的のものとは大きく異なっている。

とりわけ重要なのが、個人的パーソナリティの基礎が形成がされる乳幼児期における家族の、とりわけシステムとしての家族の相互作用のあり方である。その前に適切な個人的心理境界の機能について、より詳しく考察することが必要であろう。

個人の心理的境界機能

人間存在にとって他者との相互作用は不可欠である。乳幼児期の養育者との相互作用、遊び仲間やクラスメイトとの相互作用、成人になってからは職場その他の場での相互作用によって、人間は社会の一員となり社会を担う存在になっていく。人間の成長過程とは、他者との相互作用をととして、言語や行為規範やルールを徐々に学習していく過程である（一次的社会化）。また、学習された言語や行為規範やルールの基礎の上に、より高度な専門知識や技術を獲得していく過程でもある（二次的社会的化）。

他者との相互作用は個人にとって重要であるばかりではない。社会学でいう社会とはまさしくある特定の役割を担った人間相互の、主として言語手段を通しての社会的相互作用の総体として存在する。

しかも、それら社会的相互作用の学習の最も基礎的な部分に他者といかに適切に相互作用を行うかを学習するという過程が存在する。それがまさしく、個別システムとしての自己のアイデンティティを維持しながら周囲の外界から、物質・エネルギーや情報を摂取・排出、インプット・アウトプットするという「接触と分離」の相互作用のもとで行われる個人のシステム境界の形成プロセスなのである。

2. 「接触と分離」のバランス

社会的相互作用の二つの要件

社会的相互作用が可能になるためには以下の2点が必要である、

1. AとBが分離した個別の存在であること
2. AとBが相互に関係し合うこと

個人境界の機能を考えるために、Aという個人と、Bという個人の関係性を3つのタイプに図式化してみよう。

ⒶB 図1

Ⓐ ⇔ Ⓑ 図2

Ⓐ Ⓑ 図3

図1では、AとBの個人境界はあいまいでありAはBと、BはAと区別されるような同一性を保持していない。AはBであり、また同時にBはAであるという「共生 (symbiosis)」関係が存在する。ここではAとBとの間に明確な「分離」が存在しない。

家族システムでいえばこれがミニューチンの指摘する「絡み合った家族 (Enmeshed Family)」における二者関係である。また、これを発生論的観点からすれば、胎児が母親の母体に取り込まれている「母子共生」の状態である。

図3ではAとBの二者間の距離は遠く隔たっている。たとえ物理的距離は近くても心理的距離は遠く、AとBの間に「分離」は存在するが「接触」が存在しない。あるいは、両者の個人境界が「硬直 (rigid)」したものであるため相互作用が不可能な状態である。これはミニューチンの指摘する「乖離家族 (Disengaged Family)」における個人間の在り方である。

図2では、AとBの個人間の距離と境界は適度に保持されている。それぞれの個人境界は「柔軟 (flexible)」で相互作用が可能である。機能的な相互作用とは、行為者が自己アイデンティティを保持しながら、同時に、他者からの物質・エネルギーや情報を受容しそれによって自己を変容し、また自己の行為によって他者もまた変容できるということである。これがシステム論で重要な「浸透性 (permeability)」の概念である。ここで、重要なことは変容過程は行為者双方に関連することであり、関係性そのものが変容するとういことの認識である。

この相互作用による両者の変容は、たとえば、これまで母親の乳児への一方的影響力が重視されてきた乳幼児と養育者（主として母親）との関係にも適用されなければならない。

ホフマン理論^④

接触と分離のバランスの重要性に注目した研究者と

してはホフマン, L. が挙げられる。彼女は『システムと進化 家族療法の基礎理論』において、従来、家族システム論において、家族の機能不全の原因として取り上げられてきた、家族における、主として夫と妻の間で繰り返される「勢力問題」以上に重要な葛藤として、家族成員間の「分離と接触」の問題が存在することを強調した。

家族とともにいたいときには一緒になり、離れていたいときは一人でいることができる。そのような相互作用が家族成員間で一定のリズムのように実現されるようになった時、家族は個人にとっての居心地の良い避難所としての役割を果たすのである。家族生活に関するアンケートで「家に帰るとホッとするとか「家族といるとくつろげる」という回答が返ってくるとすれば、家族間に「接触と分離のバランス」のリズムが存在しているからである。逆に、一緒にいたいと思う時に孤独を強いられ、一人でいたいと思う時に離れることができず干渉されるような場合は、「家に帰りたくない」とか「家族はこわい」などといった家族に対する否定的な感情が生じてくるのである。

ホフマンはさらに、接触と分離のバランスが保たれた家族関係は、「社会的外皮」として家族をさまざまな困難から護る機能を持つと主張している。「接触と分離のバランス」のとれた相互作用がどのようにし「社会的外皮」として機能するかは詳しく説明されていないが、それは次のように考えられる。

私たちは「接触と分離」の適切な相互作用の中で、安定した家族システムの構造を作り出すことができる。その安定した構造は、外界の急激な変化、時としては戦争や自然災害による外部環境の破壊的変化に対して家族成員を擁護する「社会的外皮」になりうる。

しかもその相互作用のネットワークは近隣関係にもおよび、家族だけでなく地域社会全体の「社会的外皮」として機能するようになるのである。

ホフマン理論からすれば「接触と分離」のバランスのとれた相互作用を基礎に私たちの社会は成立する。

ミニューチン理論^⑤

ホフマンとは違った文脈からではあるが、「接触と分離」のバランスの重要性について論究している研究者にミニューチン, S がいる。

彼は、『家族と家族療法』のなかで、「絡み合った関係 (enmeshment)」と「乖離した関係 (disengagement)」の概念を提示している。絡み合った関係が顕著な家族は「内向的で自分たちだけの小宇宙をつくり、そのため家族員同士のコミュニケーションと関心の度は高い。その結果、家族員相互の距離は減少し、境界が不鮮明になる。家族システムの分化は『あいまい (diffuse)』になる。そのようなシステムには、過重な負担が加わり、ストレスの多い状況に適応し変化するために必要な資源に乏しくなるだろう」と、逆に、乖離した関係が顕著な家族は「過度に『硬直 (rigid)』した境界をつくり上げる。サブシステム間のコミュニケーションは困難となり、家族の保護的機能が阻害される」と説明している。彼は、この二つの類型を示した後にすべての家族はあいまいな境界と過度に硬直した境界とを持つ家族を両極とする連続線上のどこかに位置するものと考えられると説明している。

ミニューチンの絡み合った関係と乖離した関係とは、相互作用のあり方という観点からすれば、「接触と分離」のバランスを欠いた関係性ということができる。ミニューチン理論においても、「接触と分離」が可能になるような個人境界の形成が重要な課題となる。

ビーバース理論^⑥

ミニューチンと類似した概念を提示した研究者にビーバース, R がいる。彼は、「求心的家族 (Centripetal family)」と「遠心的家族 (Centrifugal family)」の二つの類型を提示する。求心的家族の最大の特徴は、家族成員間の個人的境界があいまいで、どこまでが個人の見解なのかが不明瞭な点、さらには、家族成員の見解の不一致を恐れて一致を求めるためにかえってコミュニケーション過程が混乱したものになるという点にある。これは、機能不全家族の一つの例である。他方、遠心的家族では、関心や愛情の共有が欠如し、家族内に無関心や冷淡さが蔓延していることである。これもまた典型的な機能不全家族の例である。

求心的家族には「分離」が、遠心的家族には「接触」が存在しない。そのどちらもが機能不全家族であり、機能的家族、ピーパーズの主張する「最良家族 (Optimal Family)」は、両タイプの間、に、「接触と分離」のバランスがとれた家族のことである。

エリクソン理論^⑦

最後に、エリクソン、E. H. を取り上げてみよう。かれは一般的には、母と乳幼児の接触局面を重視した理論家と考えられている。しかし、彼の著作を丹念に検討してみると、彼の母子の接触の概念には分離局面も考慮されていることが理解できる。

彼のパーソナリティの8つの発達段階の第一「基本的信頼と不信」では、乳幼児の中に基本的信頼が築かれることが重要であり、その時期にそれに失敗すると、乳幼児期のトラウマとして分裂病質の人、抑鬱状態に陥る癖のある成人になると主張されている。そしてこの基本的信頼と不信に重要な役割を持つのが母子関係である。

この基本的信頼は、「母親が見えなくなっても心配したり怒ったりしないで、母親の不在を快く受け入れることができるようになる」というように、母親の不在、母親からの分離を容認することを重要な要素として考えられている。

それは「母親が『予測できる外的な存在』になったばかりでなく『内的な確実性』を持つようになった」とされる。それは、母親と乳幼児があるときは接触し、またあるときは分離している、母親は必要なときに現れ、また離れていくといった「接触と分離のバランス」、そのリズムが形成されたということに他ならない。

3. 家族とシステム境界

個人と社会にとって社会的相互作用が重要なこと、社会的相互作用が可能になるためには接触と分離のバランスが重要なこと、そしてそのためには個人システムに柔軟で機能的な境界を形成することが重要であることを考察してきた。

つぎに、それが乳幼児と養育者とのあいだで、どのように、どのようなメカニズムによって形成されるの

かを考察してみよう。

人間をはじめとする「生きたシステム」は外部からの物質・エネルギーや情報のインプットなしには生存できない。また、同時に外部に物質・エネルギーや情報のアウトプットを行い、相互作用の相手をはじめとする外部環境を変化させていくのである。

このインプット・アウトプットのフィードバック過程をとおして、接触と分離のバランスがとれた、あるときにはリズムカルといえるような快適で機能的な相互作用のやり方をマスターしていくのである。

これを個人システムの観点から見れば、個人のシステムとしてのアイデンティティを保持しながら、外部からの物質・エネルギーや情報をインプットし、個人のシステムを変容させていく過程である。この変容の過程が「成長」とか「発展」といわれるものである。またアウトプットによって相互作用の相手をはじめとする外部環境を変容させていく過程である。ここに、相互作用の相手の「成長」と「発展」が可能になり、両者の関係性そのもの、つまり相互作用の「質的变化」が生まれてくるのである。

ここでは、次の二点に留意する必要がある。

1. 相互作用は必ず二者間のフィードバック過程を前提とする
2. 二者間の相互作用はそれぞれの物理的・知的能力格差を考慮して行われるものである

養育者と乳幼児の関係などは、養育者から乳幼児への一方的な働きかけの局面に注意がむけられやすく、従来の母子関係論では母親からの働きかけの局面が重要視されてきた。しかしシステム論的思考からすれば一方的な働きかけなどありえない。そこには必ず乳幼児からの働きかけ、フィードバック過程が存在することを忘れてはならない。ここに、システム論における直線的因果律 (linear epistemology) に対する、円環的因果律 (circular epistemology) の主張が生まれる。また、子どものさまざまな心理的社会的問題を母親の育て方にあつたとする単純な「母原病」の観念を否定する根拠が存在する。

だからといって、養育者と乳幼児の関係はまったく対等とはいえない。相互作用は乳幼児の能力にそったかたちで行われなければならないからである。

それではどのようなプロセスで接触と分離のバランスのとれた相互作用過程が形成されていくのか、そのメカニズムを分析してみよう。

二者間の相互作用は一方からの働きかけから始まる。システムとシステムの間で交換されるのは、物質・エネルギーと情報の二種類が存在するからそれぞれについて考察することにしよう。

物質・エネルギーのなかでもっとも重要なものはミルクを与えることであり、その結果としての排泄物を処理する過程である。

まず、養育者の側から働きかけることが考えられる。養育者は乳幼児の空腹時を見計らって授乳を始めるであろう。その働きかけに応じて乳幼児は乳首を吸い始める。このように養育者からの働きかけの過程は明らかである。^⑧

それでは乳幼児からの働きかけとはどんなものがあるのか、「泣き声」の存在はよく知られている。乳幼児は泣き声によって養育者の注意を引き、養育者に働きかける。もちろん、泣き声は空腹の訴えだけでなく、痛み、不快感などさまざまなメッセージを伝える。養育者はそれぞれの状況や、泣き声の様子によってメッセージ内容を読み取る必要があることはいうまでもない。

また、乳幼児のメッセージには養育者を引きつけ何かの行為を要求するものもあれば、逆に「拒絶」を伝えるメッセージもある。乳児のミルクの吸せつ行動の停止、あるいは乳首の排出行動などがこれにあたる。乳幼児は、養育者に訴えかけ、養育者の行為を引き出そうとする場合もあれば、拒絶のメッセージを発信して養育者の行為を中止させようとする場合もある。

養育者はそのつど、乳幼児のメッセージの意味を読み取りそれに適切に応じていかなければならない。

この乳幼児の呼びかけと拒絶は物質・エネルギーだけでなく、情報に関する相互作用過程にも存在する。それが「微笑」と「目のそらし」といわれるものである。乳幼児は微笑によって養育者の注意を引き、養育者からの働きかけを求め、目のそらしによって、それ以上の情報のインプットを拒絶するのである。

乳幼児は呼びかけと拒絶を意識的に行っているのではいうまでもない。呼びかけと拒絶行動は乳幼児に本

来的に備わった本能的装置に基づく。何らかの要求がある時の泣き声はその典型的な例である。「拒絶」の根底には、生きたシステムが本能的に備えている「ホメオスタシス（恒常性）」維持の機能が存在する。ホメオスタシスとは「生きたシステムの内部や外部の環境の変化にかかわらずシステムの状態が一定に保たれるという性質、あるいはその状態」をいうが、乳幼児はあまりにも多くの物質・エネルギーや情報がインプットされすぎるとそれを処理できなくなり、それを拒絶するのである。

「微笑」に関しては多少の説明が必要であろう。微笑の原形はアーカイックスマイルのように乳幼児にもともと本能的に存在するものであるが、そこに微笑を見出すのは養育者である。ある表情を養育者が微笑と認識しそれに対する養育者の喜びの反応から乳幼児の微笑の学習過程が始まるのである。泣き声と違って情報のインプット・アウトプットに関しては養育者の意図が乳幼児の働きかけ以前に存在している。これは言語の取得過程に関しても同様である。言語の原形は乳幼児に本能的に備わったものであるが、「喃語（なんご）」のなかから、意味のある言葉を形成するのは養育者の意図である。

養育者の意図とはすなわち社会の意図、社会的要請である。微笑や言語などの「情報」のインプット・アウトプットは本能的に社会的性格を帯びたものである。ただし、情報に関係する微笑にしても喃語にしてもその原形は本来乳幼児に備わったのである。その点において物質・エネルギーに関する相互作用過程も、情報に関する相互作用過程も類似した特徴を持つ。

それは、乳幼児の呼びかけに養育者が反応する、養育者の呼びかけに乳幼児が反応する、乳幼児の拒絶のメッセージに養育者が反応する、養育者の反応に乳幼児が再度反応するといった円環的なフィードバックから成立している。

社会における行動パターンの取得過程：「社会化」

キャッチボール過程

養育者と乳幼児の相互作用過程は親と子のキャッチボールの遊びにたとえることができる。

うまくいくキャッチボールにはいくつかの条件があ

る。

1. キャッチボールは子どもの成長に見合ったものである
2. 投げるタイミングをはかること
3. 成長を促すという親の意図、あるいは社会の意図が存在する

まず、キャッチボールは子どもの成長に見合ったものでなければならない。幼い子にはその子がキャッチできるようなボールを投げなければならない。また運動能力が劣る子どもにもそれなりのボールを投げるのでなければならない。そのように子どもの個性に見合った個別的な相互作用が必要である。

キャッチボールは、投げるものと受け取るものとの間でタイミングをはかる必要がある。受けての準備状態に合わせて投げるタイミングをはからなければならない。投げるものと受け取るものとの間には「交代」のルールやそのためのメッセージが存在する。「拒絶」のメッセージもそのひとつと考えられる。

またそこには、キャッチボールが上達してほしいという親の意図が、それは社会の意図でもあるのだが、存在するのである。親は時にはキャッチしにくいボールを投げるなどして子どもの技術の上達を図り、将来立派な人間、選手になってほしいという意図を伝えるのである。このキャッチボール過程があるリズムを持って、親にとっても子どもにとっても楽しいものになればこの相互作用過程は子どもの成長にとって機能的なものである。またそれは親の成長にとっても機能的なものである。というのは、子どもが上達すれば今度は子どもが親の上達を促すこともありえるからである。

養育者と乳幼児の相互作用も同様である。授乳場面においても、「サッキングが休止」したとき、養育者は乳首の「ゆさぶり」によって吸せつ行動を促す。情報のさらなるインプットを嫌って乳児の「目のそらし」が起きても、養育者は簡単にあきらめたりしない。さらなる学習を促すための努力を試みるであろう。

そこには大きくて健康な子どもになってほしい、ことばを早く覚えてほしい、という社会の期待を委託された親の意図が存在する。接触と分離のバランスを保つという機能的な相互作用の基本を維持しつつ、ある集団や社会に特徴的な相互作用のパターンや行動規範

が形成されるようになる。

乳幼児は接触と分離のバランスがとれた相互作用過程のなかで、相互作用のしかたそのものを学習すると同時に、その集団や社会の行動パターン、言語、道徳規範を学習していくのである。

これが子どもの「社会化」の過程である。

「社会化」のためにはまず「接触と分離のバランス」に基づく相互作用の基本の学習が必要であり、「社会化」は相互作用の基本の学習過程と同時に行われることが理解されなければならない。

また、機能的な相互作用は、個別システムとしての自己のアイデンティティを維持しながら他者をはじめとする周囲の外界から、物質・エネルギーや情報を摂取・排出、インプット・アウトプットを可能にする個人の機能的システム境界の形成プロセスでもある。

4. 家族システムにおける相互作用過程

乳幼児期以降の接触と分離のバランスに関連した家族システム内の相互作用はどのように行われているのか。また、その家族システムでの相互作用に問題があった時の家族システムにどのような結果をもたらすのか、三つの研究成果を踏まえて検討してみたい。

グロトバン理論[®]

グロトバン、H. D. は家族システム内の相互作用が若者のアイデンティティ形成に及ぼす影響について研究をすすめた。

その中で彼は家族システム内における主要な相互作用を以下の二種類に、そのそれぞれをさらに二つ内容に分類している。

- A. 「個別性 (Individuality)」：家族成員の個別化を促すもの
 - a 「分離性 (separateness)」：他者から区別される自己を表現する
 - b 「自己主張 (self-assertion)」：自己独自の見解を表明し、それを明確に伝える責任を持つこと
- B. 「つながり (Connectedness)」：家族成員間につながりを促すもの
 - a 「共感 (mutuality)」：他者の見解に対する感

受性と尊重

b「浸透性 (permeability)」：他者の見解に対する解放性と反応

ある個人のアイデンティティの感覚は、他者から区別された自己意識を持つと同時に他者をはじめとする外部環境に積極的に働きかけるところに生まれる。それは、まさしく、明確であるが、外部環境とのフィードバックが可能な「柔軟なシステム境界」を持つことである。

グロトバン理論は、健全なアイデンティティの感覚にとって必要な柔軟な個人境界の形成には、日常的な家族システム内において個別化（分離）を促す相互作用と、つながり（接触）を促す相互作用のバランスのとれた統合が必要なことを示すものである。

ベル理論⁹⁾

グロトバン理論に類似したものにベル, D. C., ベル, L. G の理論がある。

彼らは、家族システム内の主要な相互作用を以下の二種類に分類している。

A. 個別化過程 (Individuation Process)：相互確認的関係を通して正確な自己意識と他者認識 (other awareness) の発達に焦点がある。

B. 尊重過程 (Valuing Process)：肯定的支持関係を通して肯定的な自尊の発達に焦点がある。

これらの二種類の相互作用過程が青年のアイデンティティ形成に重要であると主張する。

彼らの「尊重過程」は接触の概念よりさらに進んで個人のパーソナリティ形成過程に言及したものと見える。分離と接触のバランスが個人システムの境界形成に機能的であるばかりでなく、家族相互間の支持過程が個人のアイデンティティの感覚の中心概念である「自尊 (self-respect)」の形成にとって不可欠なことを説明している。個人はさまざまな、冒険や挑戦、試行錯誤を積み重ねるとによって成長するものである。しかしその過程で失敗をすることもある。失敗時に相互に支持しあうことによって、失敗にも関わらず個人の自信は失われることなく自尊心は維持される。相互に尊重しあい支持しあう過程の中で自我アイデンティティは確保されるのである。支持過程とは接触時の積

極面を表現したものである。

最後に、接触と分離のバランスが家族システムに与える影響についての分析を検討することにしよう。

ルイス・ビーバーズ理論¹⁰⁾

ルイス・ビーバーズは家族システムの測定基準として1, 家族構造 (Structure of the Family) 2, 家族神話 (Mythology) 3, 目標を目指しての交渉 (Goal-Directed Negotiation) 4, 自律性 (Autonomy) 5, 家族感情 (Family Affect) の5項目を挙げているが、1, 家族構造に関する C, 親密性 (closeness), 4, 自律性に関する A, 表現の明確さ (Clarity of expression) B, 責任性 (Responsibility) C, 侵略 (Invasiveness) D, 浸透性 (Permeability) は家族成員間の接触と分離の状態や相互作用に関する測定項目である。

親密性は、家族構造を構成する構成単位としての家族成員間における接触と分離のバランスに関する記述である。一方の極では、家族間の境界はあいまいで、不明確でアモルフな状態である。他方の極では家族間の境界はあるものの接触が存在しない。親密性は両者の中間、分離していると同時に接触しているところにある。家族構造の項目としてのこの親密性は接触と分離のバランスの状態を測定するものである。

自律性に関する項目は、自律性を促進する、あるいはそれを阻害する相互作用の在り方を測定するものである。「表現の明確さ」は、他者とは違う自己を明確に表明しているかといった他者との「分離」を促進するコミュニケーション過程を分析する項目である。しかし、分離を主張するだけでは不十分であり、自己の主張や行動に責任を持つことによってその「分離」は確かなものになる。それが「責任性」の項目である。

しかし、各々の成員が自律性を持つ個別な存在であるだけでは不十分であり、相互作用が成立するためには相互に相手の見解を理解しさらに、それを自己の内部に取り入れるといった過程が重要である。それが「浸透性」の項目である。家族の相互作用は各人が自律していると同時に、相互浸透性がなければならない。

「侵害」とは相手の気持ちを読み取ってそれを表明したり (mind reading), 相手の見解を代弁すること

であるが、これは、たとえば親が子供の気持ちを先取りして親自身の見解を子どもに押し付けたり、子どもの考えを代弁して第三者に伝えるなどの行為のことであるが、これが他の家族成員の自律性の育成、とりわけ子どもの自律性を阻害することは明らかである。

彼らの研究においても、接触と分離のバランスが機能的家族システムの重要な条件として取り上げられている。また、その他の研究においても、接触と分離を促す家族内におけるコミュニケーション過程の様態が家族システムが機能に運営されているかあるいは機能不全に陥っているかの重大な要因であることが主張されている。

おわりに

柔軟な個人の心理境界を持つこと、それは「山アラシのジレンマ」や「呑みこまれ感」を持つことなく他者との相互作用を持つための基本的条件である。しかもそれは、家族システム内での日常的相互作用の中で築かれるものである。とりわけ、個人が社会の一員となるための基本である「一次的社会化」が行われる乳幼児期の養育者との相互作用が決定的に重要である。それは「接触と分離のバランス」が保たれたものでなければならぬ。この「接触と分離のバランス」やそれを基礎にした相互作用は、乳幼児期だけでなく、夫や妻といった成人期の個人にも重要なことである。ある社会的システムにおいて「接触と分離」がある種の「リズムを奏でる」ようになる時、それはその成員を外部環境から保護する「社会的外皮」として機能するようになる。「家族といるとホッとする」という家族の心理的保護機能は家族システムが「社会的外皮」として機能していることを示すものである。現代の家族機能とは、日々の日常的活動において「接触と分離のバランス」のとれた相互作用を通して、家族成員の機能的な「個人的システム境界」を形成し、さらにより優れたものにし、同時に「社会的外皮」として家族成員を保護することである。

ビーバーズが主張するように家族システム研究者の重要な任務の一つは、機能的家族システムの諸条件を確定することである。

註

- ① Clinton, W J. 2000 A PROCLAMATION: NATIONAL FAMILY WEEK, 2000 November 18, 2000
- ② Miller, J. G. 1978 Living Systems McGraw-Hill,
- ③ 遊佐安一郎 1984『家族療法入門 システムズ・アプローチの理論と実際』星和書房
- ④ Hoffman, L. 1981 Foundations of Family Therapy, Basic Books, 『システムと進化 家族療法の基礎理論』朝日出版社
- ⑤ Minuchin, S 1974 Family and Family Therapy, 『家族と家族療法』誠信書房
- ⑥ Beavers, R. & Hampson, R. 1993 Measuring Family Competence: The Beavers System Model
- ⑦ Erikson, Erik H. 1953 Psychological Issues Identity And Life Cycle, 『自我同一性』誠信書房
- ⑧ 小嶋謙四郎 1980『母子関係と子どもの性格』川島書店
- ⑨ Grotevant, H. D. 1983 'Individuality and Connectedness in the Family as a Context for Adolescent Identity Formation and Role-Taking Skill' Adolescent Development in the Family
- ⑩ Bell D. C., Bell, L.G. 1983 Parental Validation and Support in the Development of Adolescent Daughters
- ⑪ Lewis, J. M., Beavers W. R., Gessett, J. T. Austin, P. V., 1977 No Single Thread: Psychological Health in Family Systems Brunner/Mazel, Publishers, New York

和文抄録

社会的相互作用は社会と個人の基礎である。社会システムはパターン化した社会的相互作用からなり、個人は社会的相互作用なしにはこの世界で存続も発展も不可能だからである。しかしながら、社会的相互作用は、行為者が個別の存在であることと行為者間で相互に交渉が可能であることを前提としている。一方が他方に取り込まれているいわば共生関係では相互作用は不可能である。逆に両者が遠く隔たっていても相互作用は不可能だからである。接触と分離のバランスが機能的な相互作用には不可欠である。それはシステム理論の観点からすれば、機能的なシステム境界を持つことが、生きたシステムがこの世界で生き残り発展するために不可欠の要件であるということである。

現代における家族の最も重要な機能は、日常的な相互作用過程の中で家族成員に柔軟で適切なシステム境界を形成することであり、それは家族にしかできない機能である。

本論文は社会的相互作用に関する、とりわけその基礎としての個人的システム境界形成に関する理論的研究である。

KEYWORDS:

システム境界、接触と分離のバランス、機能的家族システム、家族システムにおける相互作用